

祈る者となる

ルカ 22:39~46

今はレント（四旬節）、主イエス・キリストの十字架までの40日間の時期を過ごしております。受難節とも言います。聖書を読んでいきますと十字架をピークとして様々な試練を主イエスは受けてゆかれました。しかし、内面的、心と魂においては今日のゲッセマネの園における祈りが最大の試練として記されています。主イエスはゲッセマネの園の祈りの後、心身共にひどい目にあわされ、そして最後は十字架刑と大変な試練の中を進まれますがそれでもこのゲッセマネの園での祈りの後はまるで心と魂は重荷から解放されたかのように主イエスの姿は毅然としていながら、力まないで自然体であられる印象を受けます。私たちは病気を初め、肉体的精神的に様々な心配、不安、恐れを持ちますが詰まるところ、根本的には魂に平安があるかないか、救いの問題に行き着くのではないのでしょうか？その意味において今日のゲッセマネでの祈りは私たちに深い霊的示唆を与えています。そのことを見てゆきたいと思います。

この箇所での主イエスのお姿は、今までの主イエスのお姿とまったく違ってしています。主イエスはいつも、力にあふれたお方でした。主イエスは「静まれ」という一言で、嵐を静められました。弟子たちは主イエスの力に驚くとともに、このお方についていけば大丈夫と、それから何事でも主イエスに頼りきるようになりました。ところが、ここでの主イエスは逆に弟子たちに頼っておられます。主イエスは、ふだんは、おひとりでお父なる神に祈っておられました。しかし、このときは、弟子たちを連れて祈っています。マタイの福音書では、主イエスは弟子たちに「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい」（マタイ 26:38）と言われました。主イエスは、ひとりで祈るのが不安で、弟子たちに支えてもらいたいと思われたのでしょうか。主イエスは、弟子たちが、主イエスを見捨てて逃げ出してしまう弱い者たちであることを知っていました。そんな頼りにならない弟子たちをも頼りにしなければならぬほどの不安と恐れを体験されたのです。それは、なぜでしょうか。主イエスは本当のところ一体何を苦しまれたのでしょうか。そして、主イエスは、私たちがどのように苦しみに立ち向かうようにと教えておられるのでしょうか。順を追って考えてゆきたいと思います。

先ず最初に、主イエスはなぜこんなに苦しまれたのでしょうか。

主イエスがこのように苦しまれたことを不思議に思う人が多いと思います。それは、主イエスが神の御子でありながら、同時に、人となられ、罪は別として、人間が持つすべてのものを持っておられたということを考えないからです。主イエスは、いきなり成人した姿で天から降りてこられたのではなく、マリアの子として生まれ、ヨセフを父親として、父と母の教えを受け、身体的に、知的に、霊的に成長していかれました。そして、ご自分が神からの特別な使命を受けていることを悟り、バプテスマ（洗礼）によって聖霊を受け、その使命に進んでいかれたのです。そこに至るまで、主イエスにはさまざまな葛藤があったと思います。やもめとなった母マリアを置いて、神の使命に従うにはきっと抵抗があったでしょう。主イエスはそうしたたびに、深い祈りをもって、みこころを確認し、強い意志をもってそれに従われたのです。主イエスは神の御子で、先々のことを見通しておられたから、そんなことはやすやすと出来たと言うのではないのです。

主イエスは悪魔の誘惑を受け、反対者たちの妨害を受け、弟子たちからさえも誤解されました。実際、多くの弟子たちが主イエスから離れて行きました。主イエスは神の子なのだから、そんなことも苦勞なく乗り越えたのでしょうか。いいえ、主イエスはそうしたことを乗り越えるのに、「大きな叫び声と涙をもって」されたと、聖書は教えています。ヘブル 5:7-10 にこうあります。「キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び、完全な者とされ、ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源となり、メルキゼデクの例に倣い、神によって大祭司と呼ばれました。」

聖書は、神の御子が人となられ、嘆き、苦しみ、服従を学ばれたと教えています。主イエスは誰もが感じる誘惑や、恐れ、悲しみ、心配、孤独を感じとられたお方です。神の御子だからそんなものとは無縁だ

ったというではありません。人は罪のために、正しいこと、きよいこと、美しいことを喜び、愛する思い、また、それと逆のものを憎み、斥ける思いを失ってしまいました。感情的に鈍感になっており、あまりにも物質的に恵まれた現代では、その傾向はもっと加速しているかもしれません。主イエスは、罪のない、まことの人でしたから、嘆きや苦悩を人一倍強く感じられたのだらうと思います。

苦しむ主イエス・キリストのお姿をまっすぐ見つめることはつらいことです。ぶざまで弱弱しい姿は見たくないでしょう。というよりそんな弱いお方であることを認めるわけにはいかないのです。弱さや小ささに我慢がならないのです。なぜなら、そこに苦しみ、悩んでいる自分の姿も見えてくるからです。そんなことより、映画やテレビに登場するスターがいつも、はつらつとしていて、かっこ良いのを観て楽しんだほうが、元気になると、多くの人は思っています。もし、主イエスが、ゲツセマネの園や十字架を避けて通られたなら、永遠のヒーローとなって、もっと多くの人に受け入れられたかもしれません。しかし、主イエスはヒーローとなることを望まれません。表面は幸せそうに見えても、そのたましいが痛み、悲しみ、苦しんでいる私たちの苦悩を、主イエスは体験されたのです。コリント第一 10:13に「あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。」ということばがあります。ここで「人」と言われているのは、「主イエス」を指しています。主イエスは、私たちにほんとうの救いを与えるために、私たちが遭うすべての試練、苦しみに遭い、私たちと同じようにそれを苦しんでくださったのです。だからこそ、主イエスは私たちを苦しみの中で支え、そこから救い出すことができるのです。

次に、主イエスは何を苦しまれたのでしょうか。

主イエスは「父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。」(42節)と祈られました。「杯」とは、十字架の死のことです。主イエスは、ゲツセマネの園で、十字架への道を避けられるのでしたら、避けさせてくださいと祈っているのです。主イエスは、早くから弟子たちに、ご自分がエルサレムで苦しみに遭い、命を奪われるということを示しておられました。主イエスはそれをご存知のうえで、ご自分を捕らえようと機会を狙っている人々の待つエルサレムにおいでになったのです。主イエスは十字架の死を覚悟しておられたはずなのに、なぜ、「父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。」と祈られたのでしょうか。この期に及んで怖気づかれたのでしょうか。

そうではありません。もし、十字架の死が殉教であるなら、主イエスはためらうことなくそれを受け入れられたでしょう。殉教者たちはみな勇敢に死を選びました。何年前かに長崎の「二十六聖人をレリーフした記念碑」を見ました。そこに、小さな子どもたちも天を見上げ、喜びに満たされて殉教していく絵を見ました。そのように主イエスを信じる者たちでさえ、勇敢に殉教を選んだのなら、主イエスはもっとそうだったでしょう。主イエスの十字架の死は誉れある殉教ではなかったのです。十字架の上で、主イエスは、一切の栄光を剥ぎ取られ、罪の刑罰を受けて死んでいかれました。主イエスは、そのような死を思って、苦しみ祈られたのです。人は死ぬべきものです。しかし、神の御子は死ぬことのないお方です。いのちの主が死ぬという、ありえないことが起ころうとしているのです。しかも、その死は、私たちが地上の生涯の終わりに体験するからだの死、肉体的な死だけではありません。聖書は「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」(ヘブル 9:27)と教えていますが、主イエスは十字架の上でからだの死だけでなく、神のさばきをも受けられたのです。主イエスは十字架の上で、神から引き離され、見捨てられるという霊的な死も体験されたのです。

「父よ。みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください」との祈りの「父よ」という呼びかけには、ユダヤの子どもたちが父親を親しみを込めて「アッパ」と呼んだそんな響きがあります。日本語なら「お父ちゃん」アメリカで「ダディ」と子どもたちがいうのと同じです。主イエスは神の御子として父なる神とのまじわりの中に生きてこられました。主イエスと父なる神との絆が決して切り離されることがないほど強いものでした。主イエスは、それが断ち切られる苦しみを感じとって、苦しまれたのです。神から切り離される苦しみは、神に近く、親しく生きた者でなければ実感がわかないかもしれません。主イエスが「杯を取り去ってください」と祈ったのは、主イエスが苦しみから逃れたいと思ったからではな

く、肉体的に死ぬことが怖いわけでもなく聖なる神との交わりが断たれることを悲しむ思いから出たものなのです。

最後に、私たちが苦しみに投げ込まれたとき、どうしたら良いのでしょうか。主イエスは私たちが永遠の死を苦しまなくて良いように、私たちに代わって苦しんでくださいました。主イエスの苦しみと死は、たんなる模範ではなく、身代わりの苦しみであり、死でした。しかし、主イエスに従う者も主イエスと同じように苦しみの中に投げ込まれることがあります。そんなとき、私たち、主イエスを信じ、主イエスに従い、主イエスに倣う者は、どうしたら良いのでしょうか。今朝の箇所は、私たちが苦しみに立ち向かう方法について、いくつかのことを教えています。

1)主イエスのご自分に課せられた苦しみに祈りをもって立ち向かわれました。そして、弟子たちにも祈るように教えられました。今朝の箇所は「誘惑に陥らないように祈っていなさい」(40節)とすることばで始まり、「誘惑に陥らないように起きて祈っていなさい」(46節)ということばで終わっています。「目を覚まし、誘惑に陥らないように祈る」祈りが苦しみに立ち向かう鍵なのです。「目を覚まし、誘惑に陥らないように祈る」というのは、徹夜の祈りをするということではありません。霊的に目を覚ましていて、絶えず祈り続けることを言っています。聖書は、主イエスは「いつものように」(39節)「いつもの場所」(40節)で祈られたと言っています。ゲッセマネの園は最後の晩餐のあとにはじめて行かれた場所ではなく、エルサレムに来てからずっとここに来て祈り続けておられた場所でした。主イエスが祈った時間も、いつもの祈りの時間だったかもしれません。私たちに大変なことが起こり、大きな苦しみの中に投げ込まれたとき、このようなときだから、もっと祈らなければならぬと思っても、その問題の大きさのゆえにかえって祈れないことがあります。普段から祈りによって神との交わりを深めていないと、いざという時に祈りに打ち込めないのです。

2)また、主イエスは、祈りの時、弟子たちを伴われました。そのように、私たちにも、苦しみの時、困難な時には、他の人の祈りの支えが必要です。あまりに大きい苦しみで祈れないときは、誰かに祈ってもらえば良いのです。主イエスは、弟子たちをご自分の祈りの支えにしたいと思われましたが、この時の弟子たちは、まったくあてになりませんでした。それで、弟子たちかわりに御使いが主イエスの祈りを支えました。しかし考えてみてください。リーダーが頼りない弟子達に「私のために祈ってください」とお願いするのは、つまり祈りの友を持つためには正直に自分の弱さを出せることが大切です。私の夢や願いがうまくいくように祈ってくださいというではありません。私たちには心を開いて、まごころから一緒に祈り合う人がいるはずです。信頼して祈ってもらえる人を持つことは、その人の信仰を支えます。互いに祈りあう祈りのまじわりによって、私たちの信仰は成長し、苦しみに立ち向かう力となるのです。

3)祈るときには、主イエスが「しかし、わたしの願いではなく、みこころがなりますように」(42節)と祈られたように、私たちも祈りたいと思います。つまりこれが祈りの目標となります。主イエスは、苦しみもだえて激しく祈られました。しかし、最終的な結果は父なる神にお任せになりました。「父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの願いではなく、みこころがなりますように。」この祈りは、「主の祈り」そのものです。「主の祈り」では、「天にましますわれらの父よ」で始まって、「みこころが天になるごとく、地にもなさせたまえ」と祈ります。「主の祈り」は日々の祈り、普段の祈りです。「みこころが成りますように」とは「わたしの願い」はどうしてもよいという意味ではありません。神が最善をしてくださると信じ、結果を神に任せる信仰に生きるということです。日々に、「みこころが成りますように」との祈りを重ねていくなら、私たちの人生で一番つらく、苦しいと思えるときも、この祈りによって乗り越えて行くことができるのです。

主が祈りによって勝利を得られたように、私たちも祈りによって、困難の中で支えられ、それを乗り越えて行きたいと思えます。また、困難に遭っている人々のために祈り、支える祈り手になりたいと思えます。